

氏 名：池田 真弓

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲第 178 号

学位授与年月日：2019 年 9 月 17 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 審 査 委 員：主査 片岡 弥恵子（聖路加国際大学教授）

副査 森 明子（聖路加国際大学教授）

副査 八重 ゆかり（聖路加国際大学准教授）

副査 谷口 珠実（山梨大学医学部看護学科教授）

論 文 題 目： 経膣分娩後の褥婦に対する骨盤底筋訓練指導方法の比較-経膣触診と  
経腹超音波によるランダム化比較試験-

#### 博士論文審査結果

分娩による骨盤底筋の損傷は、産後の尿失禁のみならず、骨盤臓器脱など女性の生涯の健康や QOL に大きな影響を及ぼす。骨盤底筋訓練は、これらの予防及び治療に効果的であることが検証されているものの、様々な障壁が存在する。本研究は、その障壁の一つである「骨盤底筋の収縮・弛緩の体得」にフォーカスし、体得のために有効な方法（触診による方法 vs. 超音波による方法）を見出すことを目的としたランダム化比較試験であった。予備研究として、分娩後の骨盤底筋の経時的評価、指導法に関するフィジビリティスタディ等を積み上げ、本研究の計画に至っていた。本研究は、ウィメンズヘルス看護学のエビデンス構築に向けて、新規的で非常に重要な研究であることが高く評価された。

触診群の方が超音波群よりも膀胱底部の変位の変化量が大きい、つまり触診群の方が骨盤底筋の収縮の体得に有効であるという仮説の元研究が行われた。その結果、触診群と超音波群で、プライマリアウトカムである膀胱底部の変位の変化量に統計的な有意差は認められなかったが、実測値では触診群の方が変化量は大きい傾向にあり、セカンダリアウトカムである骨盤底筋訓練の実行に向けての自信・やりがいの 1 項目において有意差が認められた。

審査の過程で指摘点は、主に以下の 7 点であった。

1. 比較した 2 群（触診群と超音波群）の相違についての理論的に明確に記述する。
2. サンプルサイズの算出に用いた RCT について、対象者、介入群と対照群、アウトカムについての測定値と効果量について追記する。
3. ベースラインにおける 2 群の背景の比較において、会陰損傷の状態等について正確

に記述する。

4. 2 群間で、膀胱底部の拳上が出来ずに膀胱底部を押し下げていた人(正しい骨盤底筋の収縮ができなかった人)、介入後に介入前よりも膀胱底部の変位の値がマイナスになった者の比較をする。
5. プライマリアウトカム及びセカンダリアウトカムの実測値を文章および表に追加する。
6. サブグループ解析を実施する理由とその正当性について追記する。
7. 研究の限界と今後の課題について、サンプルサイズの不足、アウトカムの適切性、体得に加えて骨盤底筋トレーニングの継続の効果の検討などを記述する。

以上の指摘点について適切に修正されていることについて審査員から合意を得た。以上により、本論文は、本学学位規程第 5 条に定める博士(看護学)の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。